

近代における民謡の成立

富山県五箇山地方「こきりこ」を中心に

川村清志

Formation of Folk Songs in Modern Period : Focusing on "Kokiriko" in Gokayama, Toyama

KAWAMURA Kiyoshi

はじめに

- ① こきりこの再発見
- ② 歌詞の展開とその重層性
- ③ 踊りの生成—ササラ踊りを中心に
- ④ こきりこを巡る言説の生成と分節
おわりに

【論要】

本稿は、近代日本の地域社会において、「民謡」が生成する事例として、「こきりこ」を取りあげる。ただし、ここで扱う「民謡」は、前近代から伝えられてきた口頭伝承の分野ではない。「こきりこ」は、富山県五箇山地方に伝わる民謡として、全国的に知られているが、近代以後にいったん廃れたものが、戦後になって再発見されたという経緯をもつ。その後、この民謡は、地域の保存会によって歌詞や踊りの形態が整えられ、多くのイベントに出演して知名度を増していった。つまり、「こきりこ」は、「伝統の創出」、あるいはフォークロリズム的な側面を色濃くもついているといえるだろう。

しかし、ここで注目しておきたいのは、このような「創出」の過程でどのような人的な資源、文献や口頭の資料、多様なメディア網が駆使されたのかということである。それら近代的な諸制度の配置のなかで、この「民謡」にどのような言説が付与され、錯綜し、

さらに剥離していったのかを検証することで、「民謡」の近代を考えていくことにしたい。

以下では、まず、民謡が生成する背景、あるいは資源として存在していた近世の地誌類などの文献資料と、それらを再解釈して地域の「歴史」を構成しようとする郷土史家の存在に注目する。次に再発見の過程で生じた「民謡」という象徴資本を巡る地域間での競合的な側面を明らかにしたい。逆説的なことだが、これらの競合を通じて、「こきりこ」の踊りや歌詞、由来についての言説は、一貫した歴史性や物語性を獲得していったと考えられる。そのうえで、郷土史家のような地域の側の主張に呼応する中央の研究者の視点や、両者を巻き込みながら展開していった全国規模での民謡のリバイバルを促す運動についても確認することになるだろう。

【キーワード】民謡、近代化、郷土史家、競合、田楽